

- | | | | | |
|-----------|------------|------------|-------------|------------|
| 1 中角遺跡 | 17 上伏遺跡 | 33 正善遺跡 | 49 松木遺跡 | 65 舟寄福島通遺跡 |
| 2 仙古墳群 | 18 舟橋新遺跡 | 34 姫王遺跡 | 50 平柳遺跡 | 66 舟寄遺跡 |
| 3 剣大谷古墳群 | 19 高柳中代遺跡 | 35 上小森遺跡 | 51 針原阪塩遺跡 | 67 舟寄正堺遺跡 |
| 4 大安寺古墳 | 20 高柳遺跡 | 36 西長田遺跡 | 52 本堂遺跡 | |
| 5 法土寺遺跡 | 21 下市古墳 | 37 取次遺跡 | 53 江留中遺跡 | |
| 6 漆谷遺跡 | 22 菅谷島帽子遺跡 | 38 石塚源取遺跡 | 54 江留中鷲狩遺跡 | |
| 7 四十谷古墳群 | 23 菅谷西野遺跡 | 39 石塚坪尻遺跡 | 55 西太郎丸遺跡 | |
| 8 深谷古墳 | 24 三郎丸遺跡 | 40 石塚遺跡 | 56 随応寺遺跡 | |
| 9 高屋遺跡 | 25 西堀遺跡 | 41 中庄遺跡 | 57 東太郎丸遺跡 | |
| 10 六日市遺跡 | 26 大宮遺跡 | 42 千歩寺遺跡 | 58 江留下遺跡 | |
| 11 河合勝見遺跡 | 27 開発遺跡 | 43 藤鷲塚高道遺跡 | 59 为国遺跡 | |
| 12 鷲塚遺跡 | 28 深谷古墳群 | 44 大針遺跡 | 60 沖布目北遺跡 | |
| 13 つくし野遺跡 | 29 東長田島木遺跡 | 45 安沢遺跡 | 61 沖布目遺跡 | |
| 14 天池遺跡 | 30 東長田遺跡 | 46 金剛寺遺跡 | 62 中筋高場遺跡 | |
| 15 石盛遺跡 | 31 福島遺跡 | 47 田端遺跡 | 63 正蓮花北条路遺跡 | |
| 16 土橋遺跡 | 32 若宮遺跡 | 48 高江遺跡 | 64 寄安遺跡 | |

第6図 中角遺跡と周辺の弥生・古墳時代遺跡分布図（縮尺1/50,000）

（国土地理院 平成12年6月1日発行 1：25,000地形図「越前森田」使用）

若宮遺跡（第6図32） 坂井市坂井町若宮に所在する。国営九頭竜川下流土地改良事業に伴い、平成18・19年度に県埋文が調査を実施、縄文～室町時代にわたる複合遺跡であることが判明した。弥生時代の遺構には、中期の方形周溝墓1基、後期の平地式住居5棟などがあり、遺物は後期に属するものが大半を占める。また、古墳時代の自然河川からは、廃棄されたと見られる土器が多く出土した。

西長田遺跡（第6図3） 坂井市春江町西長田に所在する。一般県道福井加賀線道路改良工事に伴い、平成11年度に県埋文が調査を実施、縄文、弥生後期末～古墳初頭、律令の各時代の遺構・遺物を確認した。弥生後期末～古墳初頭の遺構は溝2条と旧河道1条で、遺構内より土師器などの遺物を検出した。

西太郎丸遺跡（第6図55） 坂井市春江町西太郎丸に所在する。公共施設建設事業に伴い、県埋文の指導のもと、平成5年度に旧春江町教育委員会が発掘調査を実施、古墳時代、奈良・平安時代、中世（鎌倉・南北朝時代）までの期間に、断続的に営まれたと見られる集落跡を確認した。

東太郎丸遺跡（第6図57） 坂井市春江町東太郎丸字東古屋敷に所在する。福井県児童科学館建設事業に伴い、平成7年度に県埋文が発掘調査を実施、古墳時代～近世に至る集落跡を確認した。古墳時代の遺構は、溝2条、土坑4基、ピットおよび土器だまりなどで、建物もしくはそれに類する遺構は検出していない。遺跡全体で占める割合が非常に少なく、分布にも偏りがあることから、古墳時代の集落は、調査区外の北東側に中心があると推定されている。なお、平成8年度には、同事業に起因する町道工事に伴い、県埋文の協力のもと、旧春江町教育委員会が発掘調査を実施、同じく古墳・平安時代に営まれた集落跡を確認した。

江留下遺跡(境元町地区)（第6図58） 坂井市春江町境に所在する。磯部川改修工事に伴い、平成6年度に県埋文が調査を実施、古墳時代と鎌倉・室町時代を主とする集落跡であることを確認した。古墳時代の主な遺構として、一辺約18mを測る方墳1基を検出している。埋葬施設や盛土は後世の削平により消失していたが、幅1.0～1.2m、深さ1.0～1.5mほどの周溝が残存し、周溝底からは少量ながら古墳時代前期に属する土師器片が出土している。また、古墳を含めた当時の集落が、旧磯部川の自然堤防上、もしくは微高地上に存在していた可能性が指摘されている。

寄安遺跡（第6図64） 坂井市春江町寄安から福井市栗森町にかけて所在する。区画整理事業に伴い、福井市文化財保護センターが、平成11年度に発掘調査を実施、東西方向の溝3条とピット数基を検出した。溝3条のうち南側2条の溝底から、弥生時代末～古墳時代初頭に属すると考えられる、大量の土器・石器が出土している。

舟寄福島通遺跡（第6図65） 坂井市丸岡町舟寄に所在する。国営九頭竜川下流土地改良事業に伴い、平成17・18年度に県埋文が調査を実施、縄文時代晩期・弥生時代中期（下層）と弥生時代後期・古墳時代前期（上層）などの各時期にわたる遺構・遺物を確認した。弥生時代以降の主な遺構は、住居2棟、掘立柱建物9棟、井戸3基などで、住居のうち1棟は、方形周溝墓の可能性もある。遺物は弥生時代後期～古墳時代前期のものが主で、玉作り関連遺物も多数出土している。

註

- 1 中角遺跡の範囲は『福井県遺跡地図』（福井県教育委員会 1993）に基づく。ただし、平成16年（2004）に九頭竜川の堤外地区部分で実施した試掘調査では、遺構・遺物等は一切検出されず、遺跡はもともと存在しなかったか、もしくは河川の浸食により消失したものと結論付けた。

参考文献

- 小葉田淳 監修 1981 『福井県の地名』日本歴史地名体系第18巻 平凡社
- 河原純之・島田正彦・隼田嘉彦・松浦義則 責任編集 1989 『角川日本地名大辞典 18 福井県』角川書店
- 国土地理院 2004 『1:25,000 土地条件図 福井』
- 福井県教育委員会 1993 『福井県遺跡地図』
- 福井市 1990 『福井市史 資料編1 考古』
- 中森敏晴 編 2008 『中角遺跡1 - I区上層編-』福井県埋蔵文化財調査報告第100集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 坂靖志 編 1993 『剣大谷1号墳発掘調査報告書』福井市教育委員会
- 櫛部正典・川越光洋 編 2001 『法土寺遺跡I』福井県埋蔵文化財調査報告第49集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 月輪泰・櫛部正典 編 2003 『法土寺遺跡II』福井県埋蔵文化財調査報告第63集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 鈴木篤英 編 2008 『漆谷遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第31集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 天谷賢一 編 1997 『開発遺跡・高柳遺跡・石盛遺跡』遺跡発掘事前総合調査Ⅱ 福井市教育委員会
- 福井市文化財保護センター 2004 「石盛遺跡」『第19回福井県発掘調査報告会資料』 8頁
- 大川進 2007 「石盛遺跡」『第22回福井県発掘調査報告会資料』 30頁
- 海道順子 編 1998 『高柳遺跡』遺跡発掘事前総合調査事業Ⅲ試掘調査報告書 福井市教育委員会
- 福井市教育委員会 2001 『高柳遺跡・開発遺跡 -平成9～11年度にかけて行った発掘調査の概要-』
- 西向美智代 2003 「高柳遺跡(17次)」『第18回福井県発掘調査報告会資料』 26～27頁
- 白嶋祐司 2007 「高柳遺跡(30・31次)」『第22回福井県発掘調査報告会資料』 26～27頁
- 中森敏晴 1996 「菅谷烏帽子遺跡」『年報10 平成6年度』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 14～15頁
- 鈴木篤英 2007 「菅谷烏帽子遺跡」『年報21 平成17年度』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 8～9頁
- 鈴木篤英 2008 「菅谷烏帽子遺跡」『年報22 平成18年度』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 10～11頁
- 白嶋祐司 2006 「開発遺跡(3次)」『第21回福井県発掘調査報告会資料』 54～55頁
- 古川登 2008 「開発遺跡(第4次)」『第23回福井県発掘調査報告会資料』 20頁
- 山本孝一 2008 「若宮遺跡」『年報22 平成18年度』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 4～5頁
- 山本孝一 2008 「若宮遺跡」『第23回福井県発掘調査報告会資料』 4～5頁
- 田中勝之 編 2002 『西長田遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第61集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 中森敏晴 1994 「西太郎丸遺跡」『第9回福井県発掘調査報告会資料』
- 野路昌嗣 編 2008 『東太郎丸遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第39集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 中臣順・山田敏文 編 1999 『東太郎丸遺跡』春江町埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 春江町教育委員会
- 中川佳三 編 2008 『江留下遺跡(境元町地区)』福井県埋蔵文化財調査報告第33集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 白崎一夫 2000 「寄安遺跡」『第15回福井県発掘調査報告会資料』 38頁
- 赤澤徳明 2007 「舟寄福島通遺跡」『年報21 平成17年度』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 4～5頁
- 赤澤徳明 2008 「舟寄福島通遺跡」『年報22 平成18年度』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 6～7頁

第3章 遺跡の概要

第1節 層序〔第5図〕

中角遺跡は、九頭竜川北岸の自然堤防地形の微高地上に立地する。調査Ⅰ区の規模は、北東－南西方向に約150m、北西－南東方向に10～30m、総面積は2,690㎡を測る。引堤事業であるために、調査区は川の彎曲に沿って延長し、上流側（北東側）ほど幅は狭くなる。周辺の現況は住宅地で、区内の事業前の状況は、Ⅰ区－①・②が白山神社境内地、同③が市道および住宅地、同④が住宅地および市立河合小学校中角分校敷地であった（第2図）。

遺構検出面の標高は、南西－北東5.70～6.10m、南東－北西5.90～6.10mと、全体に起伏は緩やかで、ほぼ平坦な地形が想定される。後述するように、遺構検出面は調査区の大半でほとんど失われており、上記の数値が安定して捉えられているとはいいがたいが、上層でもほぼ平坦な地形が想定されており、遺構清查時にも地形上の特徴は特に認められなかったことから、下層でも同様に平坦な地形であったと判断してよいと考えられる。

標準層序はおおむね以下のように大別できる。なお、Ⅱ層上面より上の層（表土含む）は、上層調査時にすべて掘削・除去しており、下層調査にも直接関連性はないので、ここでは図示していない。

Ⅰ層：褐灰色～茶褐色粘質土で構成される上層遺物包含層。土師質皿や越前焼など、中世の遺物を主に含む。現地表下40～50cmのところにあり、堆積の厚さは30～50cmほどになる。

Ⅱ層：暗褐色～黒褐色粘質土で構成される下層遺物包含層。弥生土器や古式土師器など、弥生・古墳時代の遺物を主に含む。堆積の厚さは30～50cmほどになる。

Ⅲ層：黄褐色～黄緑褐色粘質土で構成される地山層。深度の深いところや湧水の状況によっては、青緑灰色～青灰色などの還元色になる。

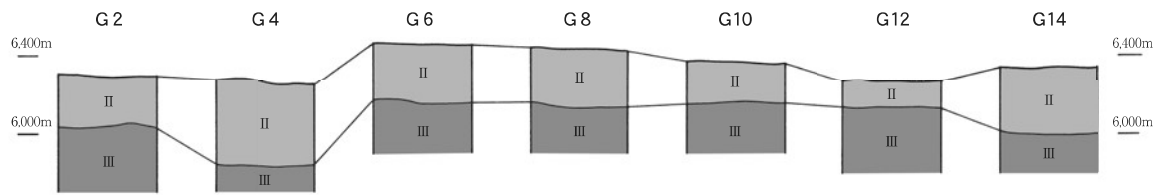
土質はいずれの層もほぼ共通しており、粘りはやや弱く、砂質ぎみで、特にⅢ層はその傾向が強い。堆積状況は、一部に例外は見られるものの、前述の地形と同様、全体として起伏は緩やかで、堆積が片寄る様子もほとんど見られない（第7図）。

遺構調査に先立って、Ⅱ層中に生活面が存在する可能性も考慮したが、Ⅱ層中の平面・断面いずれにおいても、遺構等の視認および分層がほぼ不可能であったために、確実に遺構が視認できるⅢ層上面を、便宜的に遺構検出面として設定した。

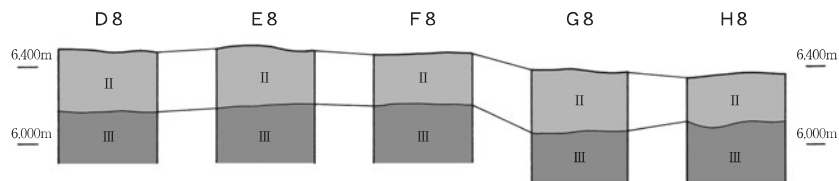
ところが、調査の進捗により、ほぼ純粋なⅢ層掘削排土による「埋め戻し」が、遺構覆土の主体を占めているという実態が判明した¹。特にⅠ区－①においては、検出面清查でも視認し得なかった遺構が芋づる式に続出、当初の予想を遥かに凌駕する、おびただしい数の遺構が検出され、調査区内をほぼ隙間なく埋め尽くすほどの結果となった。

また、Ⅰ区－③東端部（J13～14区付近）および④西半部（Ⅰ・J16～18区付近）は、昭和30年代頃までは湧水の著しい泥田で、住宅地として整備するにあたって、大量の玉石や砂を地表近くまで充填するなどの土地改良策を施したためか、Ⅰ～Ⅱ層までをほぼ完全に欠失していた。調査中も少量ではあったが、随所から水が常時滲出しており、水田とされる以前は、低湿地か沼地であったものと推察される。中角集落は九頭竜川の自然堤防上に立地しており、自然堤防の背後にしばしば後背湿地が形成されることから類推すれば、当地がそういった湿地の一部に相当する可能性は高いと考えられる。

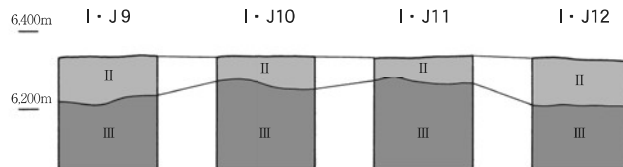
I 区-① 東西



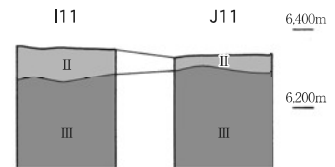
I 区-① 南北



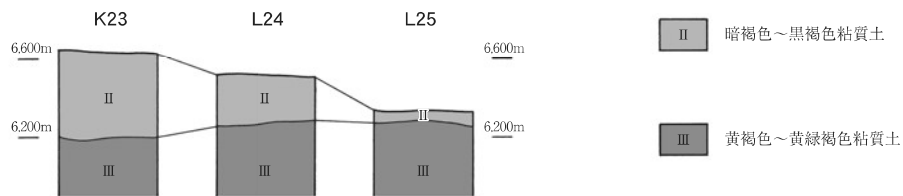
I 区-③ 東西



I 区-③ 南北



I 区-④ 東西



第7図 土層柱状模式図

第2節 遺構の分布状況〔図版第1・2、第8～10図〕

I区は3ヶ年度、4調査区に分かれるが、各区割の境界には中世の堀や後世の攪乱などが重複し、遺構同士が直接接合する箇所はほとんどない。なお、I区-①は調査時に東西で二分されているが、本節で提示する全体図は、その東・西両成果を図上で接合、修正したものである。

I区で検出した下層遺構は、周溝墓²2基、掘立柱建物22棟、井戸5基などである（第8～10図）。溝や土坑・ピットについては、遺物が出土した遺構にのみ遺構番号を付したが、その総数は、溝68条、土坑454基、ピット1,014基を数える。

遺構の分布状況については、調査区が現集落の居住域内に位置するため、建物の基礎や用水路などによる攪乱が多かった上に、上層遺構によっても相当の遺構が失われているので、結果を有り体に比較・検討するのは非常に難しい。特に遺構密集の著しいI区-①（第9図）については、個々の遺構の把握も困難なのが実状である。ただし、I区-③東端部および④西半部（第10図）で遺構の分布がまばらであるのは、前節で触れたように、当地が低湿地であり、あまり居住に適さなかったためと推測される。

第3節 遺物の出土状況

I区下層調査の出土遺物は、平成8年度で50箱（大コンテナ、以下同じ）、平成9年度で40箱、平成10年度で15箱、総量で105箱を得た。ただし、これ以前に各自実施したI区上層調査においても、下層遺物を多く得ていることから、その実質的な量は相当に多いものと推測される。なお、I区上層調査時に得た下層遺物は、すべて下層包含層遺物として扱い、あわせて整理・検討した。

下層遺物の内容は、弥生式土器および古式土師器が主体を占め、おおむね弥生時代後期から古墳時代前期までの時期幅を有する。上層調査時に得た遺物を除いても、包含層資料が量の大半を占め、遺構遺物は少ない。遺存状態も劣化したものが多く、復元資料も部分的復元にとどまるものが大半である。

他の遺物には、石器類や玉作り関連遺物がある。特に後者については、調査中に玉製品やその原石資料（剥片など）を検出したため、遺構覆土を中心に土壌洗浄を随時実施し、管玉・勾玉などの玉製品や加工途中の未成品などを得たが、玉鋸や玉錐などの工具類はほとんど得られなかった。

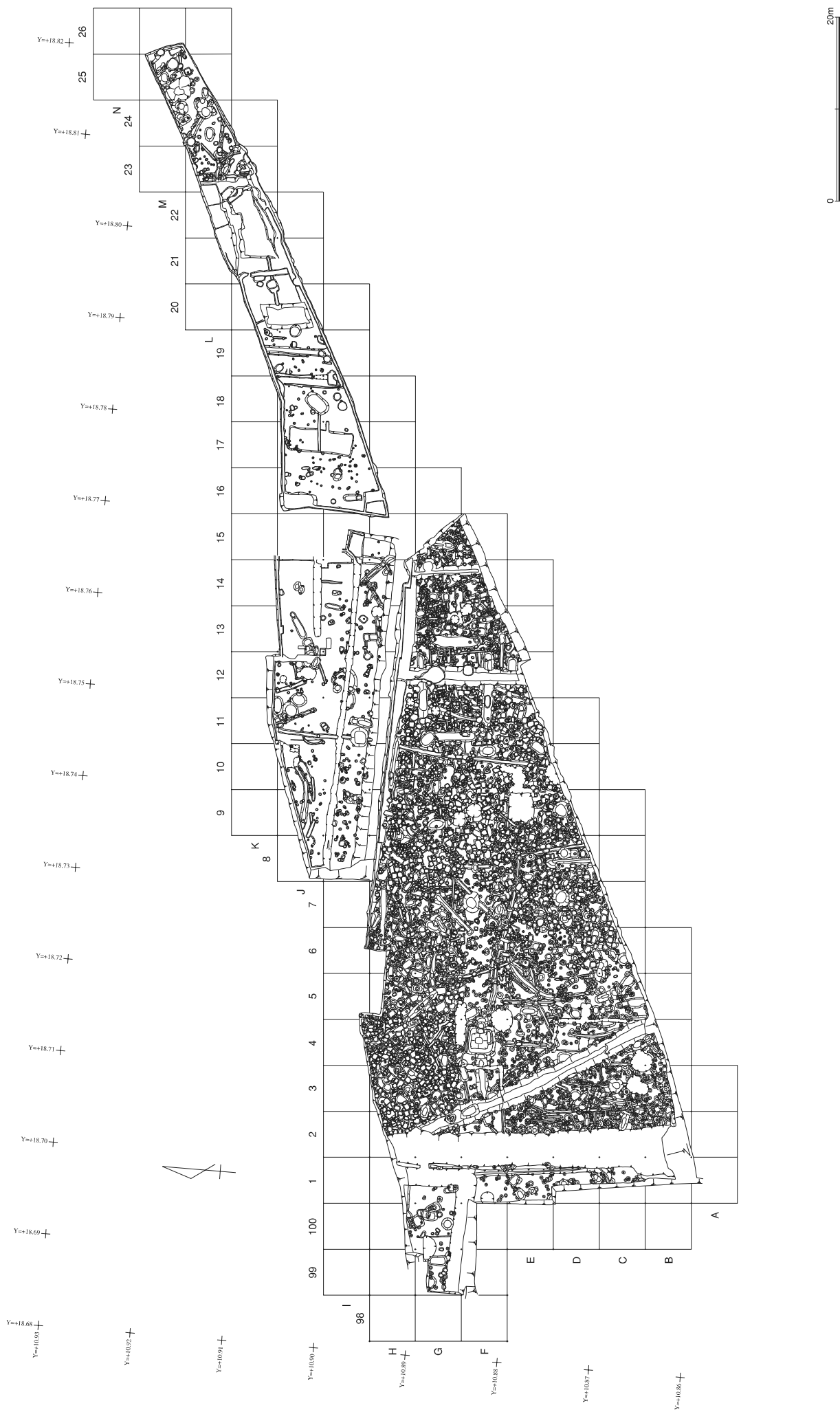
註

1 「埋め戻し」の実態が判明するまでに、以下のような事例を確認した。

- ① ほとんどの遺構の形状が不明瞭で、深度が浅い。
- ② 同じ遺構の壁面と底面とで、土のしまりが違う（壁面はやや脆いが、底面は非常に固くしめる）。
- ③ 深い遺構で、遺構覆土（Ⅱ層、Ⅱ・Ⅲ層の混合土）が底面近くで壁面の裏側に潜る（オーバーハングする）ことが多い。
- ④ 遺構の壁面に土器片が深々と突き刺さるような形で検出されることがある。

具体例を挙げると、小径でかなり深めのピットを完掘した後、ピットの壁面や周囲に亀裂が入って徐々に崩れ出し、結局は一回り大きな方形の掘り方が現れ、柱穴と判明した例が相当数あった。しかも、崩落した黄褐色土にはⅡ層の細粒や炭化物が微量ながら含まれ、時には土器片も検出された。これらの事例を総合的に判断した結果、「埋め戻し」という結論に至ったわけだが、実態が判明してもなお地山層との識別は困難で、その後も試行錯誤を繰り返した。

2 今回報告する2基については、周溝を伴っているが、いずれも築造時期は明確でなく、不明な点も多いため、便宜的に「周溝墓」と呼称している。



第8図 調査I区下層遺構全体図 (縮尺1/400)



第9図 調査I区下層遺構位置図(1) (縮尺1/250)



第10図 調査Ⅰ区下層遺構位置図 (2) (縮尺1/250)

第4章 遺構

I区下層調査で検出した遺構は、周溝墓、掘立柱建物、井戸、溝（大溝含む）、土坑・ピットである。遺構出土遺物の詳細については、次章で記述する。

各遺構の長さ・幅・深さなどの規模や方位についての数値は、すべて遺構検出面を基準として、測量図上で測定・算出した概算値である。加えて、今回の調査では中世遺構を含めた後世の攪乱や、遺構自体の密集による切り合いが著しく、特にI区-①では、ほとんどの遺構が本来の形状や規模をとどめていない。そのため、本文中で提示したこれらの数値については、相応の誤差を考慮されたい。

I 周溝墓〔図版第3、第11・12図、第1表〕

周溝墓は総数で2基を検出した。各周溝墓の詳細は一覧表（第1表）に譲り、以下は概要を記す。

(1) 周溝墓1（第11図）

いわゆる方形周溝墓である。中世の堀に大きく両断されているが、ほぼ全体形を把握できる。周溝の四隅に陸橋部を残す形態を採り、長軸の向きはほぼ東西方向に準拠する。主体部（埋葬施設）は検出し得なかったが、南辺周溝内に長楕円形の土坑を1基検出しており、周溝内への埋葬の痕跡と推測される。

(2) 周溝墓2（第12図）

南西隅の陸橋部周辺のみを検出した。ごく狭い範囲であるため、全体の規模は明らかでないが、周溝の向きから類推して、軸は周溝墓1とほぼ同様に、東西-南北方向に準拠しているものと推測される。また、周溝部の断面を観察すると、建物1の柱穴覆土が周溝覆土を切り込んでいるため、周溝墓2が建物1に先行する、という先後関係が成り立つ。

II 掘立柱建物〔図版第4～6、第13～20図、第2表〕

掘立柱建物は総数で22棟を検出した。すべて側柱建物で、このうち布掘建物は9棟を数える。なお、建物番号は1～23まで付してあるが、建物5のみ、調査当初は掘立柱建物として認識していたものの、事後の検証で、柱穴列の信憑性に疑問が生じたために除外し、欠番とした。

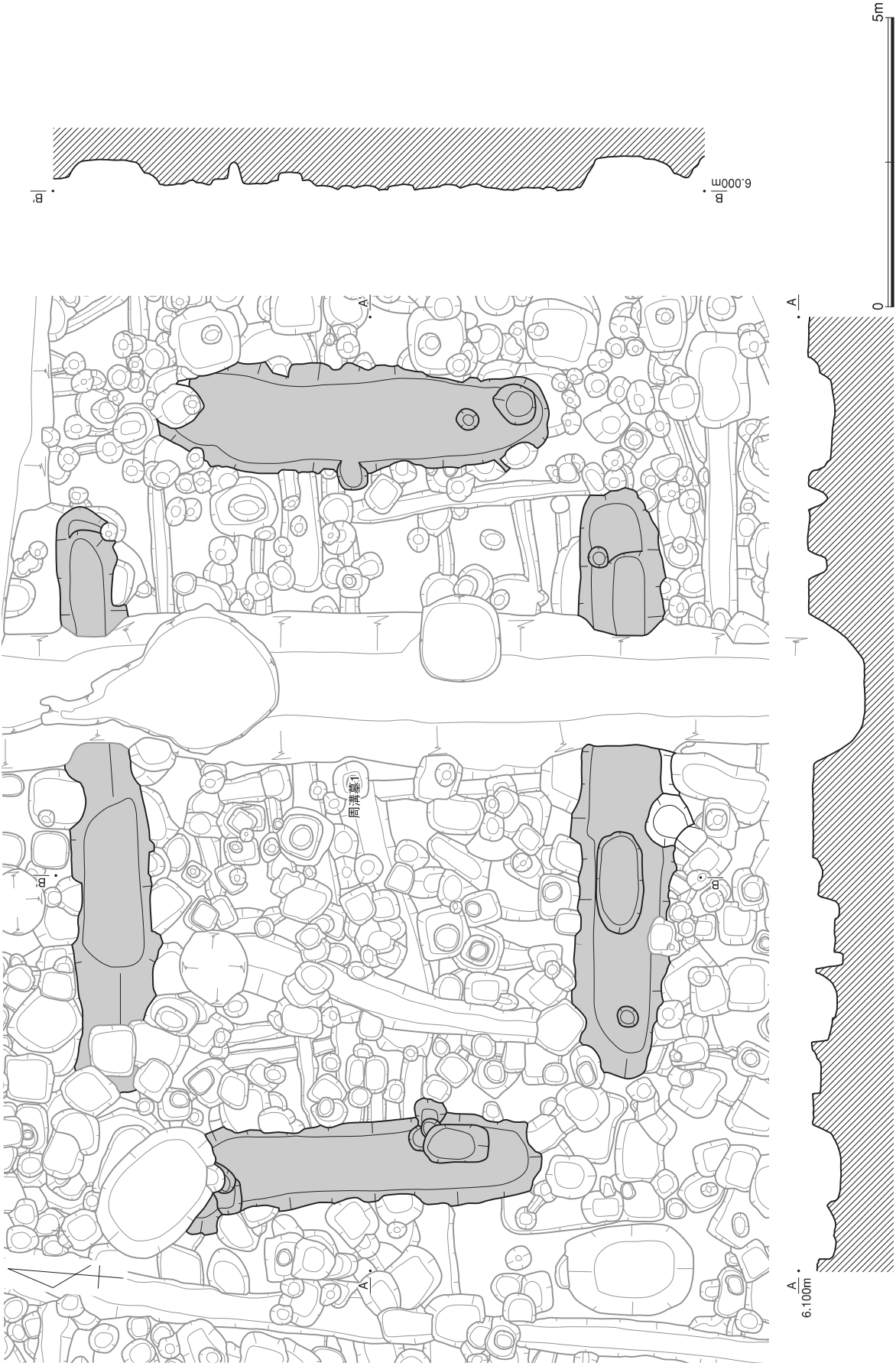
柱穴の掘り方は方形が主で、同一建物内でも大きさは一定しないが、辺長・深さともおおむね0.50～1.00mの範囲内に収まる。その方位に統一性はなく、建物自体の方位との整合性も見出せない。相互に柱穴が切り合う建物もいくつか見られるが、遺構の密集により建物自体の確認が遅れ、あるいは覆土を明確に区別できなかったため、その先後関係はほとんど検証できなかった。

各建物の詳細は一覧表（第2表）に譲り、ここでは特記すべき事項のみ、以下に概要を記す。

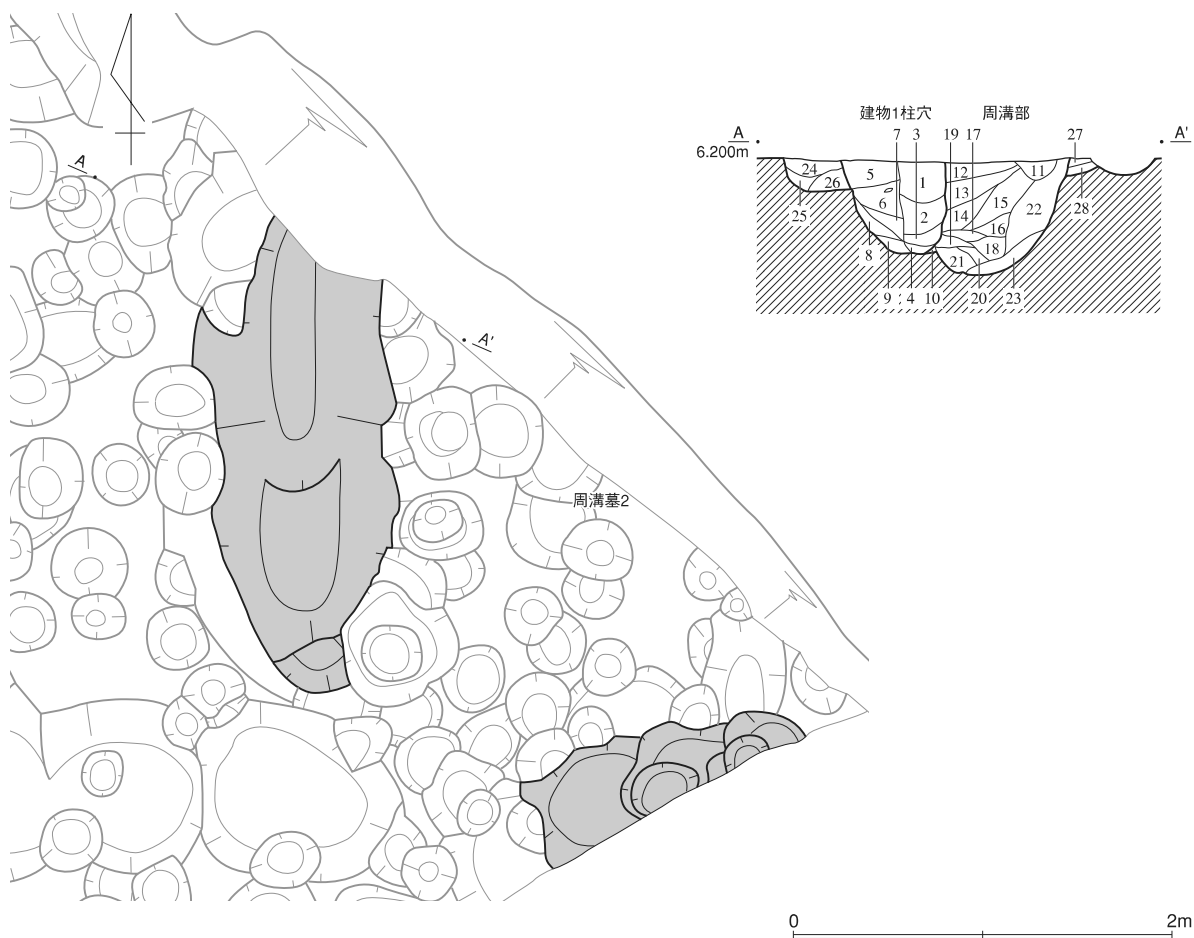
建物10（第16図）は井戸3と切り合うが、井戸の断面に布掘覆土の堆積を見出せないことから、井戸が布掘覆土を切り取っていると見なされ、建物10が井戸3に先行する、という先後関係が成り立つ。

建物14（第18図）は桁行の布掘2条で構成されるが、北梁行は中世の井戸で大きく失われているものの、南梁行の中間付近に柱穴らしきピットがあり、梁間に柱穴を伴う可能性も指摘できる。

建物17・19・22・23（第19・20図）は、いずれも布掘1条のみの検出で、対となる残り1条は調査区外か、中世遺構など後世の攪乱で失われたものと考えられる。



第11図 周溝墓1実測図 (縮尺1/100)



建物1柱穴

1. 黒灰色粘質土 粘り・しまりやや弱 ややソフト 灰混入
2. 黒灰色粘質土 粘り・しまりやや弱 ややソフト 灰多く混入
3. 黒色粘質土 粘り・しまりやや強 ややハード 茶褐色土混入
4. 暗黄褐色粘質土 粘りやや強 しまりやや弱 ややソフト 黒色土多く混入
5. 黒色粘質土 粘り・しまりやや強 ハード 黄色土ブロック多く混入炭若干含む
6. 黒色粘質土 粘り・しまりやや強 ややハード 黄色土微量混入
7. 黒褐色粘質土 粘りやや強 しまりやや弱 ややソフト 黄色土多く混入
8. 暗黄褐色粘質土 粘りやや弱 しまり普通 ややハード 黒色土混入
9. 黄褐色粘質土 粘り・しまりやや強 ややハード 黒色土小ブロック微量混入 地山層か

(地山)

10. 黄褐色粘質土 9層に似る 地山層か

周溝部

11. 黒色粘質土 粘り・しまりやや弱 ややソフト 暗灰色土若干混入
12. 黒色粘質土 粘り・しまりやや強 ややハード 炭若干含む
13. 黒色粘質土 粘り・しまりやや強 ややハード 黄色土小ブロック若干混入 炭若干含む
14. 黒灰色粘質土 粘り・しまりやや弱 ややソフト 暗灰色土多く、黄色土粒若干混入
15. 暗灰色粘質土 粘り・しまりやや強 ややハード 黒色土若干混入 炭若干含む
16. 暗灰色粘質土 粘りやや強 しまりやや弱 ややソフト 黒色土若干混入 炭多く含む

16. 暗灰色粘質土 粘りやや強 しまりやや弱 ややソフト 黒色土若干混入炭多く含む
17. 暗灰色粘質土 粘り・しまりやや強 ややハード 黒色土多く混入
18. 黒灰色粘質土 粘り・しまりやや強 ややハード 黄色土小ブロック多く混入 炭多く含む
19. 暗灰色粘質土 粘り・しまりやや強 ややハード 黒色土少し、黄色土小ブロック微量混入
20. 暗灰色粘質土 粘り・しまりやや強 ややハード 黄色土粒多く混入 炭多く含む
21. 暗黄褐色粘質土 粘り・しまりやや強 ややハード 灰多く混入
22. 暗黄褐色粘質土 粘り・しまりやや強 ややハード 黒色土小ブロック若干混入 炭若干含む
23. 暗黄褐色粘質土 粘り・しまりやや強 ややハード 黒色土少し混入

(ビット)

24. 黒褐色粘質土 粘り・しまりやや強 ややハード 黄色土小ブロック若干混入
25. 暗黄褐色粘質土 粘り・しまりやや強 ややハード 黒色土多く混入
26. 暗黄褐色粘質土 粘り・しまりやや強 ややハード 黒色土小ブロック微量混入

(ビット)

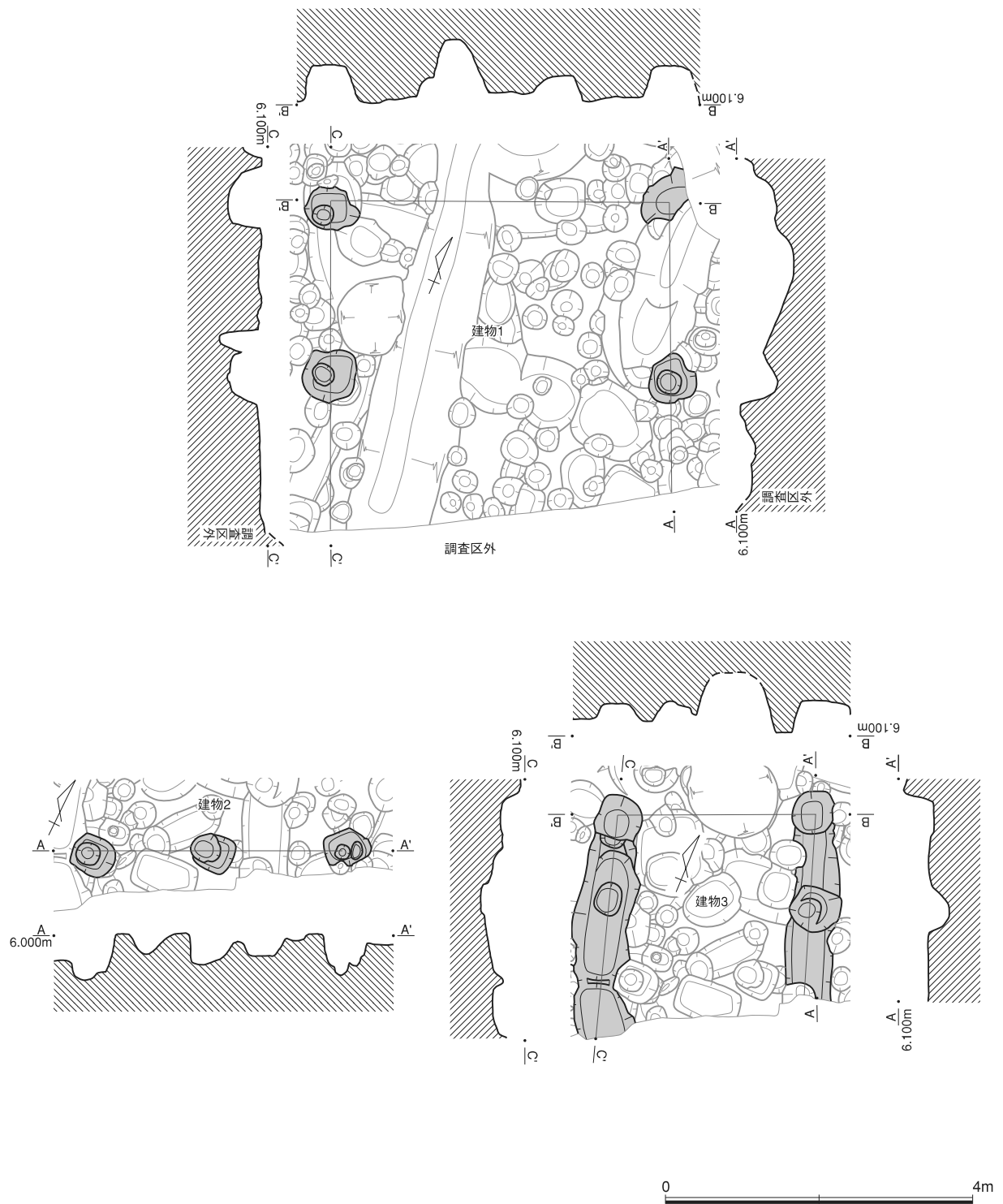
27. 暗黄褐色粘質土 粘り・しまりやや弱 ソフト 黒色土混入
28. 暗黄褐色粘質土 粘り・しまりやや強 ややハード 黒色土微量混入

第12図 周溝墓2実測図(縮尺1/40)

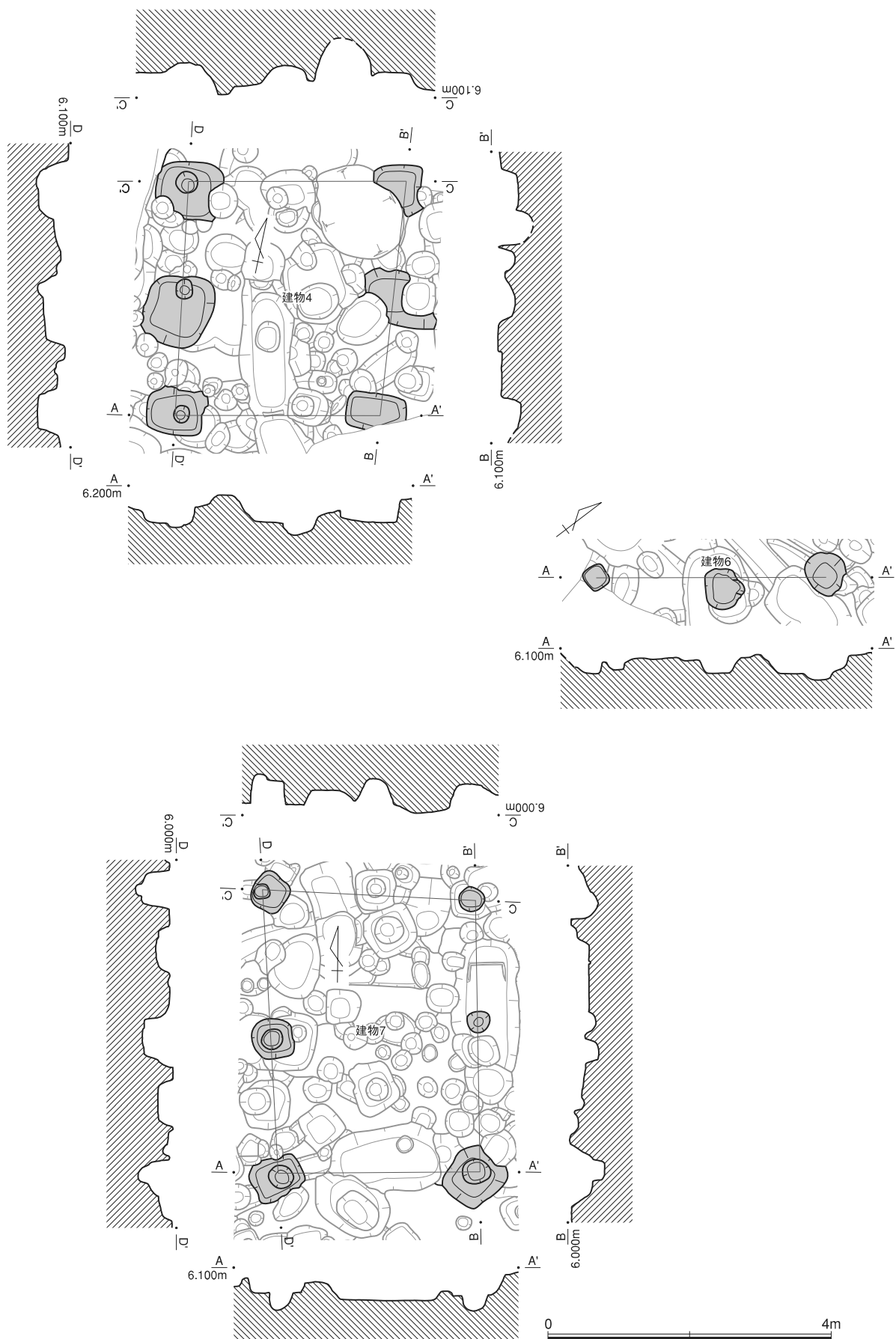
第1表 周溝墓一覧表

遺構名	地区	形態	方位 (長軸)	墳丘規模 (長軸×短軸:m)	造営 時期	出土遺物	備考	挿図No.
周溝墓1	F・G11~13	方形	N85°E	12.0×8.0	不明	甕形土器(破片)	四隅に陸橋部を残す	第11図
周溝墓2	G15	不明	不明	不明	不明	—	南西隅の陸橋部のみ	第12図

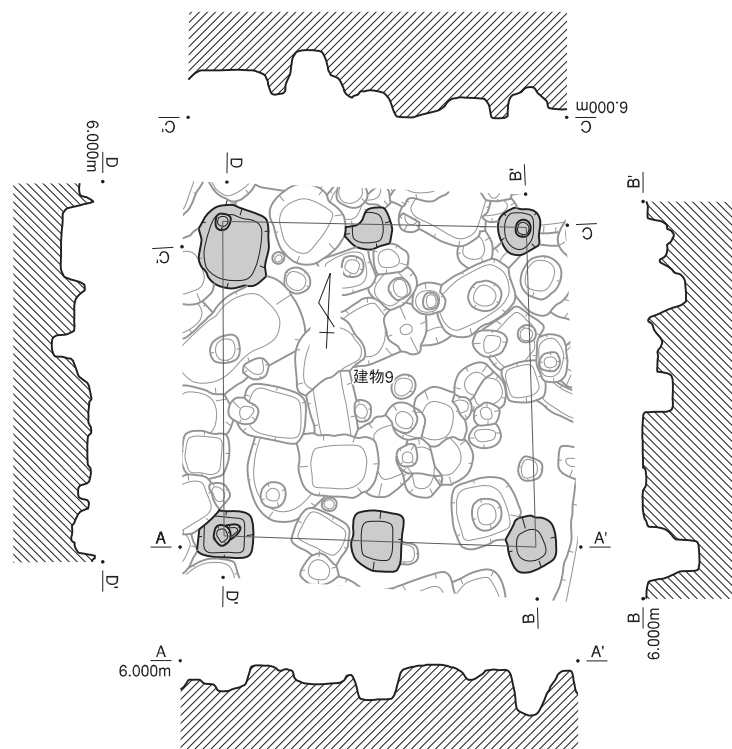
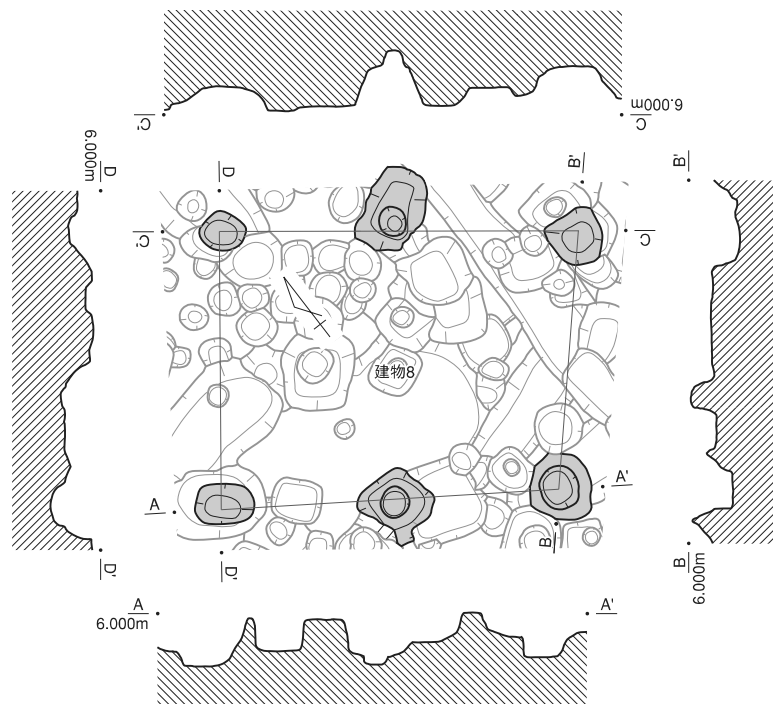
※方位・規模の数値はすべて概算値。



第13図 建物 1 ・ 2 ・ 3 実測図（縮尺1/80）



第14図 建物4・6・7実測図（縮尺1/80）



0 4m

第15図 建物8・9実測図(縮尺1/80)